

表現を生成する過程の理解を促す授業プログラムの提案 (1)

ー 創作活動場面における「見せる」行為に着目して ー

湯浅理枝¹／沼本秀昭²／高田康史³／向井陽子⁴

本研究の目的は、教員養成課程で学ぶ学生が表現を生成する過程についての理解を深めるための授業プログラムを提案することであった。身体表現においてはリズム遊び、造形表現においてはペットボトルのランドヨット製作の授業プログラムを構想した。

身体表現、造形表現の授業プログラムとも、制約を操作する手立てを設定した創作活動に加え、相互模倣や他者と比較する競争の要素を取り入れた「見せる」行為を活動の中に位置づけることにより、他者や自分自身の表現に深くかかわる活動になることが期待された。本稿で提案したプログラムを適用した実践を検証し、表現の生成や発展に貢献するプログラムへと精緻していくことが今後の課題となった。

キーワード：

表現活動、表現の生成過程、深化過程モデル、授業改善、幼小接続

所属：

1. 広島文化学園大学学芸学部

The Faculty of Liberal Arts and Sciences, Hiroshima Bunka Gakuen University

2. 広島修道大学人文学部

The Faculty of Humanities and Human Sciences, Hiroshima Shudo University

3. 広島文化学園大学人間健康学部

The Faculty of Human Health Sciences, Hiroshima Bunka Gakuen University

4. 学校法人穴吹学園 穴吹デザイン専門学校

Anabuki Design College Hiroshima

はじめに

「幼稚園教育要領」、「保育所保育指針」、「幼保連携型認定こども園教育・保育要領」が2017年に改訂された。この改訂は、幼稚園教育において育みたい資質・能力を明確化すること、「幼児期の終わりまでに育ってほしい10の姿」を明確にし、小学校教育との円滑な連携

を図ることを基本的なねらいとして行われたものである。

「幼児期の終わりまでに育ってほしい10の姿」における「表現」に深く関わる項目は、10番目の「豊かな感性と表現」である。そこには、5歳児後半までの成長の目安として「みずみずしい感性を基に、生活の中で心動かす出



来事に触れ、感じたことや思い巡らしたことを自分で表現する」姿と「友達同士で表現する過程を楽しんだりして、表現する喜びを味わい、意欲が高まるようになる」姿が示されている。これらの姿を表現活動の中で引き出すための教師や保育者の役割は大きい。

養成校は、この改訂の趣旨に基づき、5 領域（健康・人間関係・環境・言葉・表現）の「領域に関する専門的事項」と「保育内容の指導法（情報機器及び教材の活用を含む。）」により構成されている「領域および保育内容の指導法に関する科目」のコアカリに対応させながら授業改善を継続して行っている。しかし、学生の中には領域「表現」に含まれる身体・造形・音楽表現を、高等学校までの教科授業の延長上の体育（ダンス）・美術・工芸・音楽科目として捉え、それぞれに得意、苦手意識をもっている者も多いという。学生自身が表現することを楽しみ、作品の優劣や評価を気にしないで造形活動に取り組むことが保育者として幼児の表現活動を支援するため必要性であるという指摘があることから（中山，2018）、身体・音楽・造形表現の基となる専門的知識と実践力の育成は今後も大きな課題である。

「領域および保育内容の指導法に関する科目」を基に作成されたモデルカリキュラムには、「領域に関する専門的事項」の全体目標として、幼稚園教育において「何をどのように指導するのか」の「何を」教えるかの部分が示されている。モデルカリキュラム「幼児と表現」の全体目標は、「領域『表現』の指導に関する、幼児の表現の姿やその発達及びそれを促す要因、幼児の感性や創造性を豊かにする様々な表現遊びや環境の構成などの専門的事項について知識・技能、表現力を身につける。（文部科学省，2017：p.19）」と定められている。そして（1）幼児の感性と表現，（2）様々な表現における基礎的な内容，について到達目標が定められている（表1）。

到達目標からは、保育者として、幼児の発達やその表現とは何かを理解し、保育者自らも表現者として、幼児の表現を捉えることにより、幼児一人一人の発達や特性に応じた受け止めや共感ができるようになること、また表現が生まれ発展していく過程の重要性を理解し、幼児の表現を豊かに導く教材の準備や働きかけができるようになるための素地を育成することが求められている（尾崎ほか，2018）。特に、後者は「何

表1 モデルカリキュラムの到達目標（文部科学省，2017）

幼児と表現
<p>（1）幼児の感性と表現</p> <ol style="list-style-type: none"> 1) 幼児の遊びや生活における領域「表現」の位置付けについて説明できる 2) 表現を生成する過程について理解している 3) 幼児の素朴な表現を見出し、受け止め、共感することができる <p>（2）様々な表現における基礎的な内容</p> <ol style="list-style-type: none"> 1) 様々な表現を感じる・みる・聴く・楽しむことを通してイメージを豊かにすることができる 2) 身の周りのものを身体の諸感覚で捉え、素材の特性を生かした表現ができる 3) 表現することの楽しさを実感するとともに、楽しさを生み出す要因について分析することができる 4) 協働して表現することを通し、他者の表現を受け止め共感し、より豊かな表現につなげていくことができる 5) 様々な表現の基礎的な知識技能を生かし、幼児の表現活動に展開させることができる

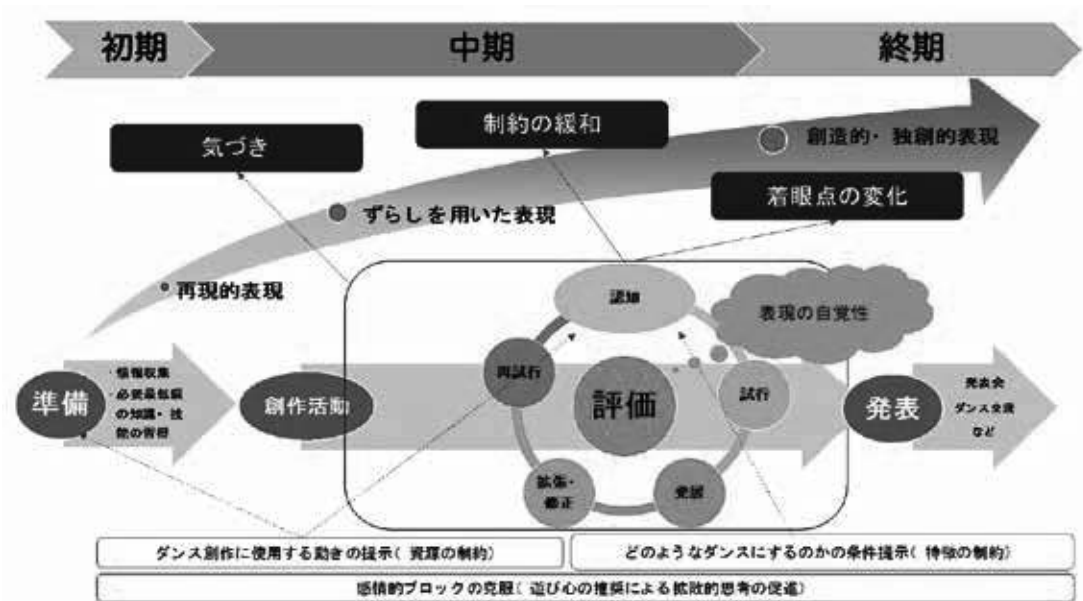


図1 リズム系ダンス授業における学びの深化過程モデル（湯浅，2022）

をどのように指導するか」の「どのように指導するか」を考え、実践していく際に保育者として必要な力となる。しかしながら、現職の保育者を対象とした、幼児の表現についての意識調査の結果では、模倣から「その子らしい表現」である創造的な表現への発展につなげることが指導と援助の課題として報告されている（奥，2007）。この結果からは、表現が生まれ創造的な表現へと発展していく過程を理解し、幼児の表現を豊かに導く教材の準備や働きかけを考えることの困難さがうかがえる。

新たな表現を生成するには、既存の枠組みを乗り越え、新たな枠組みを構築していくことが重要であることを明らかにした研究がある（高木ほか，2013）。この過程において制約を課すことが創造的な思考を刺激する助けになる（フィンケほか，1999）。例えば、アイデアや発明を生成する際に、ある種の素材を使用しなければならない（資源の制約）ことや大きさやプロダクトが可能とすることなど、プロダクトが持つ何らかの特徴（特徴の制約）を制限する

ことは創造力を促進するという（フィンケほか，1999）。また、活動の初期段階における課題の制約が厳しいほど、その後の変動性が高く維持される傾向があり、多様な表現が表出されることが明らかになっている（Stokes，2001）。これらの制約に着目した創造的認知の先行研究を参考に、美術においては学習過程で他者作品を模写するという制約により創造的な作品が生み出されたことが確認されている（石橋・岡田，2010）。湯浅（2022）は、創造的認知の先行研究をもとにリズム系ダンス授業における学びの深化過程モデル（図1）を作成し、小学校のリズム系ダンス授業に適用することで、低学年児童の表現を模倣からその子（そのペア）らしい創造的な表現へと発展させながら学ぶ姿を引き出すことができたことを報告している。これらの研究は、適切な働きかけを行うことにより、模倣をきっかけに学習者の表現を創造的表現へと発展させていくことが可能であることを示唆している。

本研究は、教員養成課程で学ぶ大学生を対象



としているが、児童を対象に構想された学びの深化過程モデル(湯浅, 2022)を適用し、領域「表現」における「領域に関する専門的事項」で扱う身体表現及び造形表現の授業を構想する。学生が模倣や既存の表現から創造的な表現へと発展していく過程を領域「表現」の創作活動(本研究では身体表現及び造形表現)を通して実感することにより、表現が生成される過程についての理解を深めるような授業プログラムを提案することを目的とする。

創作活動の活性化を促す「見せる」行為

岡田(2016)によると、触発とは「何らかのかたちで創造活動に携わっている人が、自分の外側の何か(特に、他者の仕事)に出会い、そのような出会いを通して、自らの創造活動においてモチベーションが高まったり、感情が動いたり、新しいアイデアが生まれたり、作品が変化したりする現象(p.3)」を意味するという。この触発は、表現を創作したり鑑賞したりする際に重要な役割を果たすと示唆されている(高木ほか, 2013)。触発の生起には、他者作品の模写をするなど、時間をかけてじっくり対象と

表2 「身体表現」授業内容(シラバス)

授業科目： 身体表現	
授業の目的(ねらい)	
身体表現の基礎的な知識・技能を学ぶことを通し、幼児の表現を支えるための感性を豊かにする。また、表現することの楽しさを実感するとともに、楽しさを生み出す要因についても分析することができるようにする。加えて、協働して表現することを通して、他者の表現を受け止めて共感し、豊かな表現につなげていく力を高めていく。	
授業計画	
第1回	領域「表現(身体表現)」について
第2回	人とのかかわりの中で自由に 表現する(心と体をほぐす遊び)
第3回	いろ いろな表現リズム遊び
第4回	新聞紙を使った表現遊び
第5回	カルタを使った表現遊び
第6回	わらべ歌や昔あそびを使った表現遊び
第7回	音楽にのって表現する(リズム遊び①)
第8回	音楽にのって表現する(リズム遊び②)
第9回	パラバルーンを使った表現遊び
第10回	型のある踊り(子どもの フォークダンス)
第11回	運動要素「伸びる-縮む-回る」からイメージするものを表現する
第12回	運動要素「走る-止まる」からイメージするものを表現する
第13回	創作ダンス①(イメージしたものを表現する)
第14回	創作ダンス②(イメージしたものを表現し試行錯誤する)
第15回	創作ダンス③(他のグループの表現に触れる:鑑賞)



表3 深化過程モデルを適用した学習活動（リズム遊び）の概要

シラバス		第7回		第8回	
学習の段階	初期		中期		終期
学習過程	準備		創作活動		発表
活動の流れ	1. ウォーミングアップをする。 ・手遊びや仲間集めゲームをして心をほぐす。		2. 曲に合わせて、教師の真似をしながら、6つの動きで踊ってみる。 ・動きと動きの間に休みをつくらず、流れを途切れさせないようにするために、6つの動きはすべて8カウントで提示する。		2. 発表しているペアのダンスを模倣しながら踊り合う。
	【ダンスアイテム】 ○サイドステップ ○ぐるぐる ○ひらいたり閉じたり ○よこよこステップ ○スキップ ○両手を大きく振る 資源の制約		3. 曲に合わせて6つのダンスアイテムの中から3つ以上の動きを選び、組み合わせて踊る。 ・6つのダンスアイテムの中から、ペアでお気に入りの動きを3つ以上選ばせ、順番を考えながらそれらを組み合わせて踊るようにする。 4. A・Bに分かれて、向かい合ったペアと互いに模倣しながら踊る。 ・ペアグループの工夫や良かったところを見つけながら見るように促す。		1. 曲に合わせてダンスアイテムの動きに変化をつけて、工夫して踊る。 ・ペアでできない動きとして、「タッチの動き」を入れることを提案し、ペアダンスに変化が生じするようにする。 【引き出したい変化】 ○方向の変化 ○速さの変化 ○高さの変化 ○手足の動きの変化 特徴の制約

関わることに有効であることが指摘されてきた（石橋・岡田，2010）。例えば、実際に手を動かしながら他者の描いた絵の痕跡をたどったり、長い時間をかけてじっくりと観察したりするなどのように、他者の仕事と深く関わることで、自分自身の中にある既存の価値観による制約を緩和し、表現の際の新たな着眼点を得ることにつながるという（中野・岡田，2015）。また、触発された人が生み出すアイデアやプロダクトがさらなる触発を生み出すこともあり、人の表現は触発の連鎖を通してつながっていきとされている（岡田，2013）。

そこで本研究では、他者のプロダクトと深く関わり、触発を生起させるための手立ての一つとして、自身の作品を他者に「見せる」行為を創作活動の中に位置付けることとした。造形表現場面の幼児と他者との相互行為の中でも、幼児が眼前にあるモノを他者に見せ、自分の内的なイメージや意図を伝える行為が、受け手の幼児に、模倣をしたり新たな表現を生みだしたりする契機を与えたことが報告されている（岩

立，2007）。また、佐川（2013）も幼児が製作物を「見せる」行為が相手への提案となり、受け手の幼児が相手の製作物からアイデアを採り入れ、新しい表現を生成していることを指摘している。「見せる」行為が、模倣や「ずらし¹⁾」の表現の生起に貢献し、その過程を実感することにつながると考えられる。

領域「表現」授業プログラムの構想

学習活動Ⅰ 音楽にのって表現する(身体表現)

保育内容「身体表現」は2年次後期開講の幼稚園教諭免許及び保育士資格取得を希望する30名程度の学生が毎年履修している科目である。15回分の授業内容を表2に示す。

本稿で提案する学習活動は第7回、第8回の「音楽にのって表現する（リズム遊び）」である。

学習活動の概要

低学年児童の実践である湯浅（2023）を参考に深化過程モデル（湯浅，2022）に沿って



図2 リズム遊びの「見せる」行為の場面の活動方法

学習活動の内容を表3のように構想した。

第7回の90分の活動時間では、①心身を解放してのびのび踊ることができるよう、手遊び「アルプス一万尺」の曲を使用してペアでのリズム遊びを行う。その後、「ダンスアイテム」としてダンスに使用する動きを6つ提示する（資源の制約）。ダンスアイテムの動きが概ね習得できた後、②ペアで6つの動きから3つ以上を選択し、その動きを組み合わせる8カウント×4つ分のダンスを踊るという活動を行う。

第8回では、第7回にペアでつくったダンスに変化を加えるよう教師が条件の提示をする。今回はペアでないとできない動きとして「タッチの動きを入れて踊る」ことを課す（特徴の制約）。この時、タッチの動きは手だけでなく、体のどの部分を使ってもよいことを説明し、空間、手足の動き、動きの速さ（リズム）に変化が生まれるようにする。最後に学習活動のまとめとして発表する活動を行う。

「見せる」行為について

第7回、第8回それぞれに、学習活動の最後に「見せる」行為を入れて他者の表現に深く

かかわることができる方法を構想し、設定する。

小学校体育科のリズムダンス（中学年）の活動では、仲間と踊り合う楽しさが実感できるような活動の重要性が示されている（文部科学省，2013）。そのため、本稿のリズム遊びの領域「表現」授業プログラムにおいても小学校段階への接続も考慮して「見せる」行為と模倣する行為を同時に行う相互模倣の活動を行う中で、表現が発展し変化していく過程を実感できるようにすることをねらう。

相互模倣の活動方法を図2に示す。2つのペアが互いに向かい合い、相手に見せながら、相手はそれを見ながら踊るという活動を設定する。8カウント×4つ分でペアダンスを創作しているため、まずどちらかが先に自分たちのペアダンスを踊る。その際、見ているペアは鏡のように相手のダンスを模倣する。8カウント×4つ分のダンスが終了したら休むことなく役割を交代して見せたり、模倣したりする活動を行う。

見るだけでなく、別のペアが創作したダンスを模倣することで、相手の表現に深く関わることを可能とし、新たな表現方法を自身の体を使って実感しながら学ぶことができる。加えて、



見せる側も、相手が一緒に踊りやすいようにできるだけ大きな動きで伝えようとする意識が働くことが予想される。大西（2020）は、ダンス学習特有の恥ずかしさを軽減するためには、ダンス実施の段階で小さな恥ずかしさを学びの一環として意図的に提供したり、小さな恥ずかしさを払拭するような成功体験を積み重ね、自己肯定感や自己効力感を向上させたりすることの必要性を論じている。リズム遊びの授業プログラムにおける「見せる」行為としての相互模倣は、大西（2020）のいう小さな恥ずかしさを学びの一環として提供する活動にあたると考えられる。この活動で小さな恥ずかしさを乗り越

えることにより、その後のびのびと体を使って表現する姿の生起も期待できるであろう。

学習活動Ⅱ 身近な材料を使って（造形表現）

保育内容「造形表現」は2年次前期開講の幼稚園教諭免許及び保育士資格取得を希望する30名程度の学生が毎年履修している科目である。15回分の授業内容を表4に示す。

本稿で提案する学習活動は第10回、第11回の「身近な材料を使って（ペットボトルのランドヨット²⁾）」である。

表4 「造形表現」授業内容（シラバス）

授業科目： 造形表現	
授業の目的（ねらい）	
表現は人間の本能であるとの立場に立ち、乳幼児及び自らの創造性や感性を豊かにするための基本的な造形表現の知識や技能を実践的に学ぶ。また造形表現を通して一人ひとりの思いを受け止め、主体的な学びを促すことのできる力を高める。	
授業計画	
第1回	幼児造形のねらいと内容について
第2回	コンテパステルの扱い方
第3回	クレヨンの扱い方
第4回	色鉛筆・マーカーの扱い方
第5回	水彩絵の具の扱い方
第6回	モダンテクニック（技法あそび）
第7回	版画
第8回	紙立体
第9回	粘土
第10回	身近な材料を使って（ペットボトルのランドヨット①）
第11回	身近な材料を使って（ペットボトルのランドヨット②）
第12回	自然物を使って
第13回	共同製作
第14回	鑑賞
第15回	まとめ



表 5 深化過程モデルを適用した学習活動（ペットボトルのランドヨット）の概要

シラバス	第10回		第11回
学習の段階	初期	中期	終期
学習過程	準備		発表
活動の流れ	<div>1. 教材を知る。 ・ペットボトルのランドヨットの作品例を提示し、みたり触れたり、走らせてみるよう促す。</div> <div>2. ランドヨットの基本形となる構造モデルを理解する。 ・構造モデルとともに条件を4つ提示する。 ○本体はペットボトルを使用する <div>資源の制約</div><ul style="list-style-type: none">●車輪がある●帆がある●動力は帆に受けた風力とする<div>特徴の制約</div></div> <div>3. 条件に応じた作品を製作する。 ・完成イメージを確認しながら、アドバイスや提案を行う。また、積極的な試作を勧め、試行錯誤を促す。 4. ペットボトル、車輪、帆が一体になった状態で試走する。 ・製作する、走行させるの繰り返し作業を行い、機能性やデザイン性の融合を図ることを促す。</div> <div>1. 走行テストを行う。 ・広く大きな場所で長距離を走らせることにより、まっすぐ速く走るかを確認させながら試行錯誤を促す。 2. 模擬レースを行う。 ・学生を2グループに分けることで、他学生の作品と自身の作品との競争を通じた比較や他学生の作品同士のレースからの機能性やデザイン性の気づきを促す。</div> <div>3. 模擬レースを受けて最終調整を行う。 ・まっすぐ速く走っていたランドヨットの特徴等を確認し、微調整に活かせるようにする。 4. A/Bに分かれてレースを行う。 ・A/B上位5番までに入った作品による10人の最終レースを行う。レース後はデザイン性の評価を学生相互で行う。機能性とデザイン性を兼ね備えた作品を意識することで、各作品の工夫点に気づく鑑賞につなげる。</div>		
活動場所	図画工作室		体育館

学習活動の概要

深化過程モデル（湯浅，2022）に沿って学習活動の内容を表 5 のように構想した。

第 10 回の 90 分の活動時間では、①ペットボトルのランドヨットがどのようなものかを知るために、見本を示し、親しむ活動を行う。実際に触れたり走らせたりすることで、使用している材料や工夫点を自ら発見することをねらっている。ランドヨットのイメージが膨らんだところで、②構造モデル図を配布し、使用する材料やランドヨットの特徴の条件を提示する（資源の制約・特徴の制約）。これらを理解した上で、製作活動を行う。

第 11 回では、活動場所を体育館に移し、第 10 回で製作したランドヨットを走らせながら試行錯誤する活動を行う。学生を A・B の 2 グループに分け①模擬レースを行う。その際に得られた課題をもとに最終調整を行う。その際、10 m のコースをまっすぐ走ることや帆がしっかり風を受け止めて速く走ることを主な視点と

して調整することができるよう声かけをする。最後に模擬レース同様に A・B の 2 グループに分かれた②レースを行う。A・B それぞれの上位 5 名による最終レースを行い、1 番速く走るランドヨットを決定する活動を行う。

「見せる」行為について

第 11 回は「見せる」行為と創作活動を往還させながら試行錯誤することで他者の作品と自分の作品に深くかかわることができる方法を構想し、設定した。

最初から表したいものがはっきり定まっていない中で「見る」行為と自分のイメージをもつこと、どのように表すかについて考えること、表し方を工夫することの一連の製作活動を繰り返すことにより、段々と自身の完成イメージと共に作品が具体化する過程を実感できるように意図したものである。これは小学校学習指導要領解説図画工作編（文部科学省，平成 29 年告示）の第 3 学年及び第 4 学年では「見ることに関心



を持ちながら表すことが出来るようになる中学年の児童の発達」段階で触れられている内容であり、本稿のリズム遊びと同様に小学校段階への接続も考慮したものである。

第11回は模擬レースとレースの2回の競争場面を設定することを計画している。この2つのレースにはそれぞれ異なるねらいがある。模擬レースは走らせたり、競争させたりする活動を通して自身のランドヨットの良さや課題に気づき、最終調整に向けて明確な視点を持つことを促すための活動として位置付けている。後半のレースは、自身のランドヨットの学習成果を実感することに加え、上位10人の最終レースをみることにより、まっすぐ速く走るランドヨットに施された機能性の工夫点や優れたデザイン性に気づくための活動とした。

「見る」、「見せる」活動の中に、競争という要素を取り入れることで、教師から提示された条件の1つである「帆に受けた風力を動力とする」ことに深く向き合い、まっすぐ速く走るための工夫を試行錯誤することへとつながることが期待できるであろう。

おわりに

本研究では、領域「表現」における「領域に関する専門的事項」で扱う創作活動において、模倣や既存の表現から創造的な表現へと発展していく過程を学生自身が実感することにより、表現が生成される過程についての理解が深まるような、領域「表現」における授業プログラムを提案することを目的に取り組んだ。本稿では、身体表現のリズム遊びと造形表現のペットボトルのランドヨット製作の活動概要を構想するとともに、「見せる」行為の場面に焦点を当て、自分や他者の表現に深くかかわることができるような活動を設定した授業プログラムを提案した。

身体表現、造形表現ともに、「見せる」行為に終わらず、相互で模倣し合う活動や競争の要素を取り入れた活動を設定することにより、他者の表現に深くかかわることが可能な活動を提案できると考えられた。また、「見せる」行為を活動の終末のみに設定するのではなく、試行錯誤して表現を発展させようとする場面にも設定することにより、他者の表現に刺激を受け、それを自身の表現に活かすことができるのではないかと推察された。

また、表現の生成、発展を促す手立てとして、湯浅（2022）の深化過程モデルは、2つの制約を操作することとしている。資源の制約、特徴の制約を教師が課すことにより、模倣や再現的な表現から創造的な表現へと発展していくことをねらっている。本稿の身体表現における授業プログラムでは、前半に資源の制約、後半に特徴の制約を課す場面を設定し、表現の発展に貢献しようとしている。一方、造形表現の授業プログラムは、前半で資源の制約、特徴の制約の両方を課し、学習者に見通しをもって創作活動に取り組むことができるように考えられている。それぞれの授業プログラムにおいて、制約を課すタイミングがこの場面で適切であったかについては、実践場面での検証が必要なため、今後の課題としたい。

【註】

- 1) 高木ほか（2013）によると「ずらし」とは「既有知識の中の事例の構造の大枠を当てはめ、その中の何らかの特徴を変更しながら新しい作品を作ること」と説明している。
- 2) ペットボトルのランドヨットとは安田女子大学の藤原逸樹氏が考案した教材である。本体となるペットボトルに、車輪と帆を付け、うちわなどで仰ぎ、生まれた風力を帆に受け走行する動く玩具である。



【引用・参考文献】

石橋健太郎・岡田猛（2010）他者作品の模写による描画創造の促進，認知科学，17（1），196－223.

岩立京子（2007）コミュニケーションとしての表現：無藤隆（監修）事例で学ぶ保育内容＜領域＞表現，萌文書林，16－120.

岡田猛（2016）触発するコミュニケーションとミュージアム（触発するミュージアム：文化的公共空間の新たな可能性を求めて），あいり出版

奥美佐子（2007）保育者・小学校教諭の子どもの描画過程における模倣に対する意識調査：模倣の位置付けと対処法について，名古屋柳城短期大学研究紀要，29，49－59.

尾崎公彦・青井則子・入江慶太・伊藤智里・伊達希久子・小合幾子（2018）幼稚園教育要領改訂に伴う保育内容領域「表現」に求められる授業内容に関する考察：新しい教職課程のモデルカリキュラムとの比較を通して，川崎医療短期大学紀要，38，55－61.

佐川早季子（2017）幼児同士の仲間関係形成に伴う造形表現過程の変化：4歳児の製作場面におけるモノを「見せる」行為と製作過程に着目して，保育学研究，55（1），31－42.

高木紀久子・岡田猛・横地早和子（2013）美術家の作品コンセプトの生成過程に関するケーススタディ：写真情報の利用と概念生成との関係に着目して，認知科学，20（1），59－78.

中野優子・岡田猛（2015）コンテンポラリーダンスにおける振付創作過程の解明，舞踊学，38，43－55.

中山里美（2018）総合的・横断的に領域「表現」を学ぶ授業の取り組み，富山短期大学紀要，54，88－93.

文部科学省（2013）学校体育実技指導資料第

9集 表現運動系及びダンス指導の手引き，東洋館出版社.

文部科学省（2017）幼稚園教諭の養成の在り方に関する調査研究，http://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/youchien/1385790.htm.（2024/12/22 確認）

文部科学省（2018）小学校学習指導要領（平成29年告示）解説図画工作編，日本文教出版株式会社.

大西祐司（2020）ダンス授業における「恥ずかしさ」の要因と実態，体育科教育学研究，36（1），67.

湯浅理枝（2022）リズム系ダンス授業における児童の着眼点の変容と技能の習得：小学校低学年リズム遊び授業における児童の学習過程に着目して，初等教育カリキュラム研究，10，27－37.

湯浅理枝（2023）児童の創造的活動における表現の深まりに関するメカニズム：リズム遊び授業における低学年児童の認知活動や身体活動に着目して，初等教育カリキュラム研究，11，35－44.

Finke, R. A., Ward, T. B. & Smith, S. M. : 小橋康章訳（1999）創造的認知：実験で探るクリエイティブな発想のメカニズム，森北出版.

Patricia D. Stokes（2001）Variability, Constraints, and Creativity: Shedding Light on Claude Monet, American Psychologist, 56（4），355－359.

謝辞

本研究はJSPS科学研究費補助金23K02354「リズム系ダンス授業における学習者の認知過程に関する研究」（研究代表者：湯浅理枝）の助成を受けて実施した。



**Proposal for a lesson program to promote understanding
of the process of generating expression (1)**

- with a focus on the act of “showing” in creative activities -

Rie YUASA

Hideaki NUMAMOTO

Yasufumi TAKATA

Yoko MUKAI

The purpose of this study was to propose a lesson program for students in teacher training courses to deepen their understanding of the process of generating expression. We designed a lesson program of rhythm play for physical expression, and a lesson program of making land yachts with PET bottles for plastic expression.

In both the physical expression and plastic expression lesson programs, in addition to creative activities where constraints were manipulated, we included in the activities acts of “showing” that incorporated elements of mutual imitation and competition with others. By doing so, we expected that the activities would deeply involve both the expression of others and self-expression. The next challenge will be to apply the program proposed in this paper in practice, check it, and refine it into a program that contributes to the generation and development of expression.

Keywords:

Expression activities, expression generation process, deeper learning process model, lesson improvement, collaboration between preschool and elementary school